

がん緩和ケアを「こころの専門医」に聞く



がんの告知があると、患者やその家族がこれからの生活について不安や悩みを抱えるのは言うまでもない。長年にわたり精神科医としてがん患者の「こころの悩み」に真摯に向き合ってきたのが札幌市内にある「かんの心療クリニック」院長の稲川信氏だ。

そこで稲川氏が開設する「精神腫瘍科外来」と「遺族外来」での診療や、がんに対する向き合い方について語ってもらった。

かんの心療クリニック院長 稲川 信氏

3割以上「うつ」状態に

——稲川院長は、これまでに何人のがん患者を診てきましたか。
いままでに診たがん患者さんの数は、およそ800人です。ご家族やご遺族の方を含めるとおよそ1000人になります。

——かんの心療クリニックの「精神腫瘍科外来」では、どのような症状や悩みを訴える方

が多いですか。

当院の患者さんの訴えは、「今後の経過・予後・生活・収入・家族・職業・社会的役割への不安・抑うつ・焦り・怒り・困惑・絶望」があります。

これは有名な精神科医のキュブラー・ロスの氏の「5段階モデル」と一部重なっています。また「医師や看護師、

介護士、職員とのコミユニケーションの悩み」などがあります。

それらの悩みが生活に支障をきたすレベルになる場合もあり、ある統計では、がんの告知直後には3割以上の方がうつ状態（うつ病も含めて）に、約1割の方が強い不安状態になる、と言われています。自殺については、一般の自殺率と比べて告知直後で12倍、半年で4倍、1年経っても

2倍だと言われている

す。ご家族の方の相談では「患者さん本人の身体的な経過と精神状態の経過への心配」や、それを「自分が受け止めること、支えること、看病・介護していくことへの不安や自信の欠如」についてが多いです。実際の介護では「患者さん本人の苦しむ様子をみること」や「時に八つ当たりを受けること」「親族や知人へ

の説明やその方々からの干渉」についてが多いです。

ご遺族の方からの相談では「対象喪失にまつわる悲しみ・抑うつ・無力感・自責感・怒り」などが聞かれます。体調を崩す人が多いことはすでに1970年代から指摘されています。また、精神科を受診しても混んでいて薬物療法が中心なため十分に話せなかったという声も聞きます。

自分だけではない…

——その場合、稲川先生はどういう治療を行うのですか。

私は1980年代か

ら日本のサイコoncologyをリードされた、東京女子医科大学と埼玉医科大学の元教授の



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)